



環境意識 を育む若者たち



イノベーションの実践に取り組む

人々と地球の役に立つ

既成の枠を押し広げる

道を照らす



米国内務省
第16巻 第7号
2012年4月

Coordinator, Dawn L. McCall;
Executive Editor, Nicholas S. Namba;
Director of Written Content, Michael Jay Friedman; Editorial Director, Mary T. Chunko; Managing Editor, Ashley R. Donahey; Production Chief, Michelle Farrell; Production Manager, Janine Perry; Designer, Dori Walker

米国内務省の国際情報プログラム局は、eJournal USAのロゴ名で電子ジャーナルを発行し、米国内務省や国際社会が直面する主要な問題、ならびに米国内務省の社会や価値観、考え方、さまざまな制度について検証しています。

最新号はまず英語で発行され、続いて電子版のフランス語、ポルトガル語、ロシア語、スペイン語版が発行されます。必要に応じてアラビア語、中国語、ペルシア語の翻訳版が発行される場合もあります。ジャーナルはそれぞれ、発行巻数と、号数別に目録に掲載されます。

ジャーナルの中で提示された意見は、必ずしも米国内務省の見解や政策を反映するものではありません。米国内務省は、ジャーナルがリンクするインターネット・サイトの内容、およびこれらのサイトへの継続的な利用の可能性について、一切の責任を負いません。各サイトについての責任は、サイトの発行者のみに帰属するものとします。ジャーナルに掲載される記事や写真、イラストは、著作権についての明記がない限り、米国内務省での複製や翻訳を認めますが、明記があるものについては、ジャーナルに記載されている著作権保有者の許可を得なければなりません。

ジャーナルに関するご意見等は、米国内務省大使館、アメリカンセンター Japan、および各地のアメリカンセンター・レファレンス資料室、または下記の編集部までお寄せください。

Editor, *eJournal USA*
IIP/CD/WC
U.S. Department of State
2200 C Street, NW
Washington, DC 20522-0501
USA
E-mail: eJournalUSA@state.gov

編集・発行: アメリカンセンター Japan
(2014年5月)

本号の日本語文書は参考のための仮翻訳であり、正文は英文です。

本号について

「私はまだ子どもですが、私たち皆がこの地球という大きな家族の一員であり、ひとつの目標に向かって心をひとつにして行動しなければならないことを知っています」

1992年リオ地球サミットにおけるセバン・カリス・スズキ (12歳) のスピーチより



Courtesy photo/Ashoka's Youth Venture

スベルをつづろー青少年の組織づくりを支援する団体「ユースベンチャー」のために、手で「change」の文字をつくる子どもたち

1992年、108カ国の国家元首を含む172カ国の代表、および2万4,000人を超えるNGO代表者がリオデジャネイロに集まり、第1回国連環境開発会議（リオ地球サミット）が開催された。11日間におよぶこの会議中に行われたスピーチのなかで、ひとりの参加者の発言が特に大きな感動を呼んだ。カナダからやって来た12歳のセバン・スズキである。

今では「世界を5分間沈黙させた少女」として知られるスズキは、世界中から集まった代表に向けて熱を込めて語りかけ、地球とそこに住む人間を守るように世界の指導者に真剣に訴えた。彼女は、すべての人が持続可能な開発という基本的な考え方を守ること、すなわち、環境を保護し、未来の世代が引き続き地球の天然資源と高い生活水準を享受できるような方法で生活し成長を図ることを強く求めたのである。

スズキのスピーチ以降、持続可能な開発の分野における若者の活動は増え続けている。現在、世界の人口の半分以上が25歳未満であり、発展途上国に住んでいる若者の割合はさらに高い。何百万人という若者が、気候変動・貧困・病気の脅威にさらされた世界を受け継いだり、そうした世界を次の世代に手渡したりすることは望まないことを表明し、自らの創造性や活力を発揮し粘り強く行動することで、より持続可能な世界へと至る道を切り開こうとしている。

『eJournal USA』本号では、よりクリーンで地球にやさしく持続可能な未来への道を若者がどのように開きつつあるかを探る。環境団体の立ち上げから代替エネルギー資源の開発まで、今日の若者は、世界をより良い場所にするために必要な資質や能力を備えている。

目次

環境意識を育む若者たち

米国国務省 2012年4月 第16巻 第7号

2 現代をリードする今日の若者たち

アストリッド・ニコール・ウン

地球全体の問題に対する革新的な解決策を生み出し、持続可能な未来へと続く道の先頭を歩む若者たち

5

イノベーションの実践に取り組む



5 若者から始まる持続可能な社会

世界で高齢化が進む中で、将来の世代のためにより明るく、環境によりやさしい未来の実現を目指して活動する若者たち

8

人々と地球の役に立つ



8 廃棄物から「ぬくもり」へ

貧困家庭のために使用済み食用油を代替エネルギー源へと変える取り組みを進めるロードアイランド州のティーンエイジャー・グループ

10 ライドシェアリングで車と環境汚染を減らす

通勤者に車の相乗りを働きかけて環境保護を進めるメキシコの若い起業家たち

11 地球を守る取り組みを進めるインドネシアの若者の団体、サーバット・アラム

15歳の環境保護活動家アデルリン・ティファニー・スワナ。1人の人間でも大きな変化を起こせることを示す

12

既成の枠を押し広げる



12 空気をきれいにし、教育を後押しする「グリーンシールドズ」

スクールバスのエネルギー効率とコスト効率の向上に取り組む16歳のジョニー・コーエン

13 ろうそくの明かりで風車をつくる

ウィリアム・カムクワンバはマラウイの学生。廃品の金属とプラスチックから発電用風車を作り出す

14 騒音が電気に

騒音をクリーンで再生可能なエネルギーへ変換する取り組みを進めるシャルジャ・アメリカン大学の4人の学生

15

道を照らす



15 インドの農村にイノベーションの明かりを灯す

2人の若い起業家がトラクターを利用して、農村の生徒たちが夜間勉強できるよう支援

16 チーム・ベルギー：手の届くソーラー住宅を

ふつうの住宅と同程度の手の届く価格で、エネルギーニュートラルな住宅づくりを目指すベルギーの学生たち

18 箱の中で調理

ジョン・ペーマーが発明した「京都ボックス」。調理にクリーンなエネルギーを使うのが難しい人々に大きな恩恵

19

要点



19 2012年に「グリーンな行動」を実践すべき10の主な理由

リオ+20への道

今年は世界中の若者にとって、地域と世界の持続可能な開発に関する諸問題について、運動を起こし、行動する年である

Front cover photos: Kendra Helmer and Ben Edwards/USAID (left); ©AP Images/Andre Penner (top right); Courtesy of GreenShields (center); ©Tom Rielly (bottom right) Back cover photo: ©AP Images

現代をリードする 今日の若者たち



アストリッド・ニコール・ウン

私たち若者が子どものころからよく耳にしてきた言葉の1つに「今の若者は明日のリーダーだ」という言葉がある。この言いまわしは、私たちの奮起を促して精一杯の努力をさせるためのものだが、この言葉を聞くと、私たちが今選択することが、最終的には私たち自身や地域社会、そして世界に影響を及ぼすのだということに改めて気付く。

私たち若者は自分たちの世界にどのような影響を及ぼし得るのか。幸いなことに、待つまでもなく、その答えはすでに明らかである。さらに言えば、私は「今の若者は明日のリーダーである」というスローガンを「今の若者が今日をリードし、明日をリードし、そして、そう、毎日をリードしている」と変えるべきだとさえ考えている。

注目！ドイツ・ベルリンのブランデンブルグ門の前で「地球保護区」の標識を掲げる欧州緑の党青年部のマリアナ・ペネバ

私たち若者が私たちの住む世界にどのような影響を及ぼしているかについて、私は「マイ・コミュニティ、アワ・アース (MyCOE)」の活動を通して目の当たりにしてきた。MyCOEは、南アフリカのヨハネスブルグで2002年に開催された「持続可能な開発に関する世界サミット」に向けてつくられたプログラムである。過去10年間に、気候変動、グリーン経済、食糧安全保障、危険と脆弱性などの分野で、若者が主導する地域密着型の、持続可能な開発に関するプロジェクトが500以上立ち上げられた。MyCOEの私たちのチームは、世界中の若者に地理学の分野から情報とツールを提供するとともに、若者が自分たちの住む地域社会のために持続可能な解決策をつくりだすのを手助けしている。

このプログラムは多くの点で若者の生活を変えた。彼



大きな声で歌おう！ 2002年に南アフリカ・ヨハネスブルグで開催された「持続可能な開発に関する世界サミット」の開会式で、参加者を迎える少年少女のコーラス

らは奨学金を受け、地域の環境リーダーに任命され、自治体などが新しい環境保護策を導入する際には指導的な役割を果たした。

若者は、どうすれば社会に影響を及ぼすことができるのだろうか。そのためには、相互につながりを持つこと、お互いの間にある違いを乗り越えること、この惑星に住む地球市民のひとりとして、直面する問題の革新的な解決策をつくりだすために結束することが必要だ。現在、携帯電話や地図作成アプリケーション、ソーシャル・ネットワーキング・ソフトウェアなどの通信技術により、世界の人々とつながりを持つことが可能になっている。マウスをクリックすれば国境を越えてつながることができる。オンライン地図作成ツールは、地球が抱える問題をよりはっきりと視覚化するのに役立つと同時に、解決策を考え出す際の案内役となってくれる。

現在、私はMyCOEのバーチャル交流プログラムで仕事をしている。米国国務省の資金援助を受けているこのプログラムは、ボリビア、ガーナ、ニカラグア、フィリピン、米国の高校生を交流サイトとテレビ会議のソフトウェアを介してつなぐものである。このプログラムで私は、ネットワークでつながった高校生たちが、持続可能な開発に関する経験や体験——自分たちができること、やったこ

と、そして現在やっていること——を共有する手助けをしている。高校生が協力して持続可能な開発の問題に取り組むにあたり、私は彼らを指導し、地球市民であるとはどういうことなのかを理解してもらって手助けをしている。私たちは皆、国籍も話す言語も違うが、こうした地球全体に関わる問題に共に立ち向かい、ひとつのチームとして作業している。世界は場所が違えば、変化の起こり方も違う。別の場所で世界がどのように変化しているのかを理解できれば、自分の国で自分たちが抱えている問題の解決方法を知ることができる。

「リオ+20」のようなイベントには、若者の参加が非常に重要である。というのも、若者は新鮮な目と活発な頭脳、そして広い心を持っているからである。若者は自分のやり方にそれほどこだわらないから、他人を締め出すようなことはしない。進んで他人の意見から刺激を受けようとする。自分の信念はしっかり持っているが、新しい考え方や意見に影響されて自分が変わっても構わないと思っている。若者は、古い世代が「理想主義的だ」と考えそうな、新鮮で新しい考え方をうち出す。抱えている問題があまりに厳しいときには、楽天的になることが大切だということを私たちは分かっている。自分たちにとって重要な問題と戦うエネル

ギーを私たちは持ち合わせている。

そうは言うものの、若者にも克服すべき課題はある。一部の若者は、自分たちが持つ影響力に気付

いていないため、そもそも問題に取り組まない。若者は自分の意見を声に出して言わない。若すぎるから自分たちが本当に何かを成し遂げることなどできないと思っている。十分な経験がないため、「若者の世界」だと思っているものと「世の中」とを結びつけることができない。この2つの世界の間に橋を架けるだけでなく、2つの世界が実は同じひとつの世界なのだと思わなければならぬ。自分たちが使えるツールを自分たちのために使う必要があるのだ。

同年代の人たちに私ができることがあるとすれば、それは「私たちはリオ+20に出席しなければならない。自ら取り組まなければならない。自覚しなければならない。こうした問題に真正面から全力で取り組まなければならない」ということだろう。なぜそうしなければならないのか。

500

子どもが立ち上げた

環境

プロジェクトの数

in the last

10
YEARS

Kendra Helmer and Ben Edwards/USAID



一からやり直し—ハイチのラ・ビジット国立公園で木の苗木を植える少女。過去10年間に若者が立ち上げた環境プロジェクトの数は500を超える

©AP Images/The Hawk Eye/John Lovretta



さあ、拾おう！10歳のケルシー・ゴール。こうした子どもたちが環境をきれいにするために行動している

Courtesy of ISD/Earth Negotiations Bulletin



発言する若者たち！2011年に開催された「国連持続可能な開発委員会の第19回会合」で、環境を壊さずに使用できる、化学物質の代替物質の必要性を訴える青年代表のケイト・オファードール

それは、私たちが今日をリードしているからだ。私たち若者は成長するにつれて人生の教訓を学び、いずれはもっと優れたリーダーになれるだろう。しかし時間は待ってくれない。今日のリーダーとして共に行動しよう。そうすれば明日の私たちの助けになる解決策を見いだすことができる。さあ、持続可能な開発のために日々努力を続けようではないか。



アストリッド・ニコール・ウンは23歳で、アメリカ地理学会（AAG）の研究助手。AAGはパートナーシップ・プログラム「マイ・コミュニティー、アワ・アース（MyCOE）」の事務局を担当している（www.mycoe.org）。ウンはカリフォルニア州出身で、現在はパナマに在住、AAGの青少年関連プロジェクトのいくつかで、オンライン・ネットワークの運営支援や交流支援を行っている。時間があるときは、ダンスや読書、友人や家族と一緒に過ごすのを楽しんでいる。



さらに詳しい情報はMyCOEのウェブサイトで見ることができます。
<http://goo.gl/P2DLC>

本稿で示された意見は、必ずしも米国政府の見解あるいは政策を反映するものではない。



若者から始まる 持続可能な社会

走行準備完了 2009年の「地球温暖化防止を呼びかける国際デー」のパレードで自転車に乗るベトナムの学生たち。大勢の若者が改革を提唱することで持続可能な開発を支持している



©AP Images/Enid News & Eagle/Billy Hefton

2011年に70億人を超えた世界の人口は、21世紀中頃までに90億人に達すると予想されている。成人まで生き延びる子どもが増えるにつれて、そして人々の寿命が延びるにつれて、地球の資源に重い負担がかかるようになる。将来の世代が現在の私たちと同じ恩恵を受けられるように、私たちは新しい暮らし方を学ぶことを求められている。

私たちは現在のニーズを満たすと同時に、将来の世代が彼らのニーズを満たすのに難儀するような状況を招いてはならない。そのために重要なのが「持続可能な開発」であろう。現在であれ未来であれ、環境を破壊することなく、また健康的な暮らしをする権利を誰からも奪い取ることなく、充実した生活を送ること、つまり、健康に豊かに賢く成長することが、誰もが有るべき姿なのだ。

行動を起こす強さ

今生きているすべての人間の半数以上が25歳未満である。途上国では、若者の割合が85%に達する場合もある。しかし若者の強さは単に数の多さに由来するのではない。

何百万人という若者が、気候変動や貧困、病気の脅威にさらされた世界を受け継いだり、そうした世界を次の世代に手渡したりしたくないことを表明している。彼らは自らの創造性や活力を發揮し粘り強く行動することで、経済成長と環境保護のより良いバランスをとろうとしている。

若者は多くの方法で持続可能な未来を確かなものにしようとしているが、そのひとつの方法は、変革の提唱者になることである。

その良い手本を示しているのが、インドネシアの少女アデリン・ティ

ファニー・スワナである。スワナは10歳で自分の環境団体「サーバット・アラム」を設立した。インドネシア語で「自然の友」という意味だ。5年後の現在、この環境団体はインドネシア全土に2,000人近くの会員を擁している。スワナはその優れた唱道活動により、

国際的に評価され称賛されている。スワナの活動は、賞を受けたウェブサイトの運営から、歌づくりやテレビ番組の制作まで多岐にわたっている（11ページ参照）。サーバット・アラムの会員は、教育や唱道活動の他にも、砂浜の清掃、サンゴやマングローブの植樹などを行い、言葉を実行に移している。

より環境に優しい未来に向けてのトレーニング

若者が持続可能な解決策を見出す方法のひとつは、教育を通じてである。起業家やイノベーター（革新者）として持続可能社会で成功するためには、現代の若者は科学、テクノロジー、工学、数学などの分野の知識と能力を身に付ける必要がある。そうした知識や能力を使えば、昔は考えられなかったようなアイデアが可能になるのである。

アラブ首長国連邦のシャルジャにあるアメリカン大学の学生4人のチームを例に挙げよう。彼らは騒音をエネルギーに変える方法を思いついた。ほとんど誰も考えたことがなかった代替エネルギー資源を探求し、驚くべき結果を出したのである（14ページ参照）。

極めて革新的なアイデアといっても、それが非常に複雑である必要はない。インドの田舎では、固い決意を持ったある学生が、トラクターのエンジンから「明かり」をつくる装置を考え出した（15ページ参照）。マラウイのあるティーンエイジャーは、廃品置き場から集めた部品で風車を建てた（13ページ参照）。

人の役に立ち、地球を守る

人の役に立つことと地球を保全す

ること。この2つを両立させられるということも、若者は証明している。米国ではティーンエイジャーのグループが、貧困世帯に「ぬくもり」を届けるとともに、その過程で使用済み食用油を再生利用するプログラムを立ち上げた（8ページ参照）。メキシコでは、若者の起業家グループが自分の国に何か役に立つことをしたいという欲求に動かされて、ライドシェアリングを仲介する会社を設立した（10ページ参照）。

持続可能な開発はぜいたくなことではない、必要なものだということも若者は理解している。持続可能な開発に高級品の値札が付いている必要はないのだ。ケニアのあるエネルギー起業家は、田舎で薪を探す必要もなく二酸化炭素でいっぱい煙を出すことなく調理できる太陽熱調理器を開発した——それも、ひとつたった5ドルで（18ページ参照）。

ベルギーの大学生は、持続可能性は手の届くコストで実現できるだけでなく、魅力にあふれたものでもあることを実証した。彼らがつくった住宅は太陽エネルギーを利用したもので、Eキューブと呼ばれ、あるコンテストで入賞した。Eキューブは、省エネと衝撃的なデザインの出会いによって、ゼロカーボン生活に向けたスタイリッシュでハイテクな方法を提供できるということを示している（16ページ参照）。

今、より良い明日を築く

肝心なことは、若者が持続可能な開発に取り組むことである。それによって、すべての人が機会と資源に恵まれた、地球に優しい未来という夢が現実のものになる可能性があるからだ。私たちが現在直面している環境問題や経済・社会的な課題に対処するためには、国際協力だけでなくひとりひとりの取り組みも必要である。そして、若者にはこの両方を実現する力がある。今の若者は明日のリーダーである。したがって、先陣を切るのは早ければ早いほどいい。これはすでに多くのケースで実証されていることである。

——アシュレー・レイニー・ドナヘイ

ご存じでしたか？

若者は1992年の第1回リオ地球サミットから気候変動に関する国際会議に参加してきた。2009年、国連は、青少年を気候変動に関する国際交渉におけるステークホルダーとして正式に認めた。この年、1,500人の若者が、デンマークのコペンハーゲンで開かれた国連気候変動枠組条約第15回締約国会議（COP15）に参加した。それ以降、国際会議に参加して意見を述べる青年代表の数は増加し続けている。今年もリオ地球サミットから20年目の節目を迎える。リオデジャネイロで開催される持続可能な開発に関する国連会議（通称、リオ+20）は、会議に向けて「青年大会（YOUTH BLAST）」を創設しており、2,000人を超える若者が参加を予定している。

見開きの反対側ページ 私を捕まえないで！カンザス州で蝶の「渡り」を追跡するプログラムの一環としてオオカバマダラを手にするケルシー・クローリー。開発と環境を調和させるために青少年が活動している

このページ 共に環境意識を育てよう—アマゾンに自生する樹木について学ぶブラジルの子どもたち。「持続可能」という考え方や習慣を小学生に教えるブラジルの国としてのカリキュラムの一環



「子どもらしい」考えがなぜいいことなのか、理由を説明している12歳のアドラ・スピタークを見よう！
<http://goo.gl/u0cbO>

©AP Images/Andre Penner

写真の中、上から

食用油

使用済み食用油をリサイクルしてください

油脂を燃料に変えよう



廃棄物から「ぬくもり」へ

ジェーン・モース

米国人は揚げ物が大好きだ。毎年、米国では、好物の揚げ物料理をつくるのに莫大な量の食用油が使われている。その結果、捨てるのが難しい油脂が大量に残る。多くのレストランは民間企業に金を払って、自分の店を出た廃油を処分している。しかし、ロードアイランド州では、ティーンエージャーのある先駆的なグループがそうした使用済みの油脂を有効利用する方法を思いついた。

2008年、ロードアイランド州ウエスタリーの中学生5人が油脂を燃料に変える「プロジェクトTGIF (Turning Grease into Fuel)」を立ち上げた。使用済み食用油を燃料に変える方法を見つけ出し、つくった燃料を貧困家庭の暖房用に寄付したのである。5人はウエスタリー町議会と協力して廃油の回収コンテナを用意した。今では、地元のレストランや住民は店や家庭から出た使用済み食用油をリサイクル用に寄付することができるようになった。

TGIFに協力しているパートナー企業の1つはグリース社である。同社は回収コンテナから使用済みの食用油を集め、バイオディーゼル燃料の精製業者へ届ける。精製業者はそれを燃料にリサイクルする。こうして作られた燃料は、暖房の支援を必要とする慈善団体や家庭へ配布される。

これまでのところ、プロジェクトTGIFによって生産されたバイオディーゼルは年間3万ガロン(11万3,562リットル)——これは約6万ドルに相当する——を超え、大気中に排出される二酸化炭素60万ポンド(27万2,155キログラム)近くを相殺するようになっている。生徒たちはこれまでに地元の慈善団体に1万4,000ガロン(5万3,000リットル)を超える再生燃料を寄付し、緊急に暖房支援が必要な家庭144世帯を援助した。

プロジェクトTGIFはロードアイランド州でも米国全体でも認められた存在である。特筆すべきは、2009年に「若者のための大統領環境賞」を受賞したことである。この賞は1971年に設けられて以来、米国の大気、水、国土の保全

に貢献した米国人の若者に授与されてきた賞である。

TGIFの設立者の1人で13歳のカサンドラ・リンは、環境保護活動を積極的に行ったことを認められて、国連環境計画(UNEP)から表彰されている。リンは2012年にリオデジャネイロで開催される「持続可能な開発に関する国連会議(リオ+20)」に1,400人の若者代表の1人として参加する。リンは自分たちのプロジェクトが人々と環境の両方に役立っていることをとりわけ誇りに思っている。「私はインパクトを与えたいのです」とリンはUNEPに語っている。「年齢なんて関係ありません。誰だって何かを変えることはできるのだから」

ジェーン・モースは米商務省国際情報プログラム局のスタッフライターである。

見開きの反対側ページ 「無駄がなければ、不足もない」—使用済み食用油をエネルギーに変えるプロジェクトを進める生徒たち。(左から右へ)マーク・ウォーカー、マイルズ・テムル、バネッサ・パーチュ、マリサ・キアラディオ、タイラー・フィオレチエティア、カサンドラ・リン

右側ページ 「さあ、持ってきて！」—地元のお祭りで、食べ物売の屋台から出た使用済み油をリサイクルするため、リサイクル用のドラム缶を設置。(左から右へ)カサンドラ・リン、バネッサ・パーチュ、タイラー・フィオレチエティア、ジョン・ペリーノ、マイルズ・テムル

プロジェクトの仕組みについて説明するTGIFチームを見よう!
<http://goo.gl/82XtG>



Photos courtesy of Westery Innovation Network





ライドシェアリングで 車と環境汚染を 減らす

ジェーン・モース

イグナシオ・コルデロ——が初めて出会い、ライドシェアリング事業について各自のアイデアを話し合ったのは2010年8月であった。そして、2011年1月には、相乗りサービスを始めていた。

ライドシェアリングはメキシコ市のような都市では非常に人気がある。同市で車を運転する人は、1日平均2時間を車の中で過ごすからである。アVENTネス社はチリでもすでに事業を開始しており、ラテンアメリカ全域の交通量の多い都市に事業を拡大したいと考えている。

アVENTネス社の創設者たちは、革新的で環境に優しい事業を立ち上げたとしていくつか賞を受賞している。「南北アメリカ大陸才能・革新コンテスト」の2011年Eビジネス賞や、世界規模で行われるインターネットサイトのコンテスト「世界サミット青年大賞」で2011年の環境部門賞『Go Green!』などである。

ジェーン・モースは米国務省国際情報プログラム局のスタッフライターである。

上 乗せてもらえますか？若き起業家
クリスティーナ・バラシオスとイグナシオ・
コルデロ。自分たちが設立したアVENT
ネス社のサービスを使ってメキシコの通
勤者に車の相乗りと環
境保護を実践するよう
促している

アVENTネス社について
もっと知りたい人はウェブサ
イトを見よう！
<http://goo.gl/BWuRV>



「車と排ガスを減らして、住みよい町を」——これはメキシコに本拠を置き、オンラインでライドシェアリングを仲介する会社「アVENTネス」のモットーである（アVENTネスは「乗ること・乗せること」という意味）。

アVENTネス社は、5人の若いメキシコ人起業家が自分たちの住む町で自家用車の相乗り利用を推進しようと設立した会社である。同社は通勤の交通手段を必要としている人と、それを提供できる人とを結ぶオンライン・サービスを提供している。会員は自分のプロフィールを作成して同社の紹介サイトに登録し、「乗せてあげる」というオファーか「乗せてほしい」というリクエストを出す。オンライン・ソフトウェアが条件の合う相手を見つけ出して、どこで落ち合えばよいかを提案してくれる。

アVENTネスを設立した5人は、いずれも25歳から30歳で、環境意識の向上につながるような事業を立ち上げたいと考えていた。それだけでなく、メキシコの生活の質を向上させたいとも望んでいた。同社を設立した1人、クリスティーナ・バラシオスはこう語る。「いつも、自分の国を良くするために何かをしたいと思っていました。だからアVENTネスが生まれたのです」

バラシオスとその仲間——アニバル・アバルカ、アルベルト・パディージャ、フェデリコ・アラトリステ、

地球を守る 取り組みを進める

インドネシアの若者の団体、 サーバット・アラム

ローレン・モンセン

アデリン・ティファニー・スワナは母国における環境保護の重要性を理解している。この15歳のインドネシア人の少女は、自国の首都ジャカルタで起きた恐ろしい洪水を目の当たりにした。洪水の原因の一部は浸食作用と気候変動にあった。

2008年、スワナはまだ11歳にもなっていなかったが、洪水を防ぐために何かをしようと決めた。学校が休みの間に、スワナは同年代の友達150人近くを集めてマングローブの木を植えた。マングローブの木はハリケーンや津波による被害を食い止めるからだ。

初めての活動でマングローブを植林してから、スワナは環境問題に取り組みようとさらに大勢の生徒を集めた。インドネシア全土の若者に声をかけて、サーバット・アラム（「自然の友」の意味）という団体を組織したのである。

スワナをはじめとするサーバット・アラムのメンバーは、インドネシアのプラムカ島で、島の周囲にある傷ついたサンゴ礁を回復させよう

と新しいサンゴを植えた。魚の養殖やカメの保護、植林の手助けもしている。

サーバット・アラムはジャカルタに本拠を置いている。今では世界的に認められた非営利団体であり、その環境保護プロジェクトにより数々の賞を授与されている。

スワナは地球を守ろうと人々に働きかけるために多くのことを行ってきた。自分のアイデアを学校や政府機関に提案する、環境保護についてのテレビ番組を制作する、英語とインドネシア語で歌を録音するなどである。

サーバット・アラムのスポークスマンとして、そして若者の手本として、スワナの生き方は1人の人間が世の中を変えられるということを示している。

国連環境計画の「国際青少年会議」が2011年にインドネシアで開催された。会議の場で、スワナは次のように述べた。「私たち子どもは木を植えたり、川や浜辺を掃除したりする

ことはできません。でも、産業活動で私たちの川が汚染されるのを防ぐことはできません。グリーン・エコノミーの導入を業界に強制することもできません。私たちは産業を持続可能なものにする政策や法律を望んでいるのです」

スワナは2011年にマレーシア中国商工会議所(MCCC)の「環境大賞」というグランプリを受賞した。サーバット・アラムを通じてのスワナの取り組みが実を結び、この賞と賞金6,000ドルの獲得につながったのである。スワナはMCCC当局に次のように語った。「私たちはこの小さな手で変化を起こすことができます。私は世界中の若者に呼びかけたいと思います。どうすれば環境を保護できるのか、私たちのアイデアを提供しよう」と

ローレン・モンセンは米国務省国際情報プログラム局のスタッフライターである。



Photos courtesy of Sahabat Alam

上 私の後が続け！2010年にブラジルで開催された「青少年国際『地球を守ろう』会議」で誇らしげにインドネシア国旗を振るアデリン・スワナ

左 私たちは豊かだ！サーバット・アラムは地元の学校と協力してインドネシアでサンゴを植えている。インドネシアはブラジルに次いで世界第2位の生物多様性を誇る

スワナの映像『Our Small Hands Against Climate Change (気候変動と闘う私たちの小さな手)』を見てみよう！
<http://goo.gl/P4tkY>



空気をきれいにし、教育を後押しする グリーンシールドズ

メアリー・キャサリン・リーム

米国では平日、約48万台のバスが2,600万人を超える子どもを学校へ送迎している。交通手段をシェアすることで二酸化炭素排出が抑えられれば、環境保護に役立つ。しかし古くなったスクールバスは、多くの環境汚染を生み出す恐れがある。スクールバスをもっと「環境にやさしく」する方法はないものだろうか。

それがある日の午後、学校から歩いて家に帰る途中、ジョニー・コーエンの頭に浮かんだ疑問だった。不恰好な車体のスクールバスを見て、当時11歳だったコーエンは、もっと流線形のバスを作ることはできないものかと考えた。

コーエンは、バスの前面にシールド、つまり透明な覆い板を取り付けて空気の流れを変えるというアイデアを思いついた。このアイデアを試すために、コーエンは「グリーンシールドズ」というプロジェクトを立ち上げた。バスにプラスチックパネルを取り付けることで空気抵抗を減らし、エネルギー効率を高めようというプロジェクトである。

「グリーンシールドズの目的は、ガソリンを節約することで学校がその分より多くのお金を教育に充てられるようにすること、そしてガソリンをより効率的に使うことで環境汚染の減少につながることで」とコーエンは言う。

姉のアッツァと友人たちの手助けもあり、コーエンは社会起業家を支援する国際的団体であるアショカから、

上 最先端—ジョニー・コーエンのグリーンシールドズ・プロジェクトには、マサチューセッツ工科大学やノースウエスタン大学をはじめとする学校からボランティアが参加した。マニー・キャズロ、スティーブ・ジェイコブソン、ファン・ベレスもそのメンバーである
下 さあ仕事だ！スクールバスの前面に透明なパネルを取り付けるグリーンシールドズの発案者ジョニー・コーエン。こうしたパネルを取り付けることによって、空気抵抗を減らし、バスの燃料効率とコスト効率を高める

1,000ドルのユースベンチャー助成金を授与された。

コーエンのチームはその資金を元に、試作品テストのための風洞を作った。2010年にはコンセプトに改良を加え、ペプシ・リフレッシュ・プロジェクトから2万5,000ドルの助成金を受けた。

グリーンシールドズの成功に感心したイリノイ州のバス会社社長、ジョン・ベニッシュは、コーエンのチームにスクールバス1台を寄贈し、ノースウエスタン大学工学部の学生たちを募集してプロジェクトの改良を手伝わせた。

イリノイ州ジョリエットで先頃行われたテスト走行では、シールドを取り付けることで、燃料消費を28%削減することができた。いくつかの試算によれば、この削減により米国の学校は全体で年間6億ドル以上を節約することが可能である。



Courtesy of GreenShields/Natalie Sarada

今年コーエンは、2012年「ブルデンシャル・スピリット・オブ・コミュニティ賞」にイリノイ州代表として参加する。この全米規模のプログラムでは、優れた青少年ボランティア活動を表彰している。

コーエンは言う。「僕の目標は、この技術を米国のすべての学区に広めることです。しかしそれだけでなく、どんなアイデアであっても、試してみれば何かの結果を生む可能性があるのだという希望を子どもたちに与えたいのです」

メアリー・キャサリン・リームは、米国務省国際情報プログラム局のインターンである。



詳細はグリーンシールドズのウェブサイトへ！
<http://goo.gl/ApNnD>

Courtesy of GreenShields



ろうそくの明かりで 風車をつくる

ルイズ・フェナー



Photos: Tom Rielly

ウィリアム・カムクワンバは15歳のとき、彼の住むマラウイの辺境にある村ウィンベの廃品置き場の中を捜し回っていた。

カムクワンバの家には水道も電気もなかった。家族は毎日2時間かけて水汲みに行き、パラフィンろうそくで明かりをとっていた。カムクワンバは中等学校を中退した。家族に授業料を払う余裕がなかったからである。カムクワンバは図書室で1日を過ごして勉強を続けた。図書室には文字通り彼の人生を変える本があった。その中の1冊が表紙に風車の写真が載った本だった。

「私は英語がよく読めませんでした。ですから主に写真と図形を見ながらこれらのことを独学したのです」とカムクワンバはブログで語っている。彼がブログを開始したのは2007年のことで、廃品の金属とプラスチックから最初の風車をつくってから5年が経っていた。カムクワンバはさびたトラクターの羽根を風車の回転部であるローターに利用し、その他にも壊れた自転車、プラスチックパイプ、木片などを利用した。さらにハンマーやねじ回し、座金もすべて自分で作った。

カムクワンバが最初につくった風車は、高さが5メートル（15フィート）で、電球数個とラジオをつけるのに十分な電力を生み出した。カムクワンバは、その後さらに2基の風車を彼の家の周辺につくった。また井戸も設置し、そのおかげで家族は畑に水を引き、1年を通じて農作物を育てることができるようになった。

しかしカムクワンバは自分の家族を助けるだけでは満足していな

い。彼の目標は、マラウイのすべての人々の生活を向上させることである。自分の家の風車をつくって以来、カムクワンバは地域社会におけるマラリアの予防、太陽光発電のポンプを利用した清潔な水の供給、点滴かんがいシステムの構築に取り組んできた。

カムクワンバは復学し、南アフリカ共和国ヨハネスブルクのアフリカン・リーダーシップ・アカデミーを卒業した。その後、彼は「風をつかまえた少年（原題The Boy Who Harnessed the Wind）」という本を共同執筆した。また、世界経済フォーラムやTEDグローバルをはじめとする世界中の多くのイベントで自身自身の体験について語った。彼の活動はNGO「ムービング・ウインドミルズ」に刺激を与えた。同団体はマラウイの農村部の経済発展と教育プロジェクトを支援しており、その支援により、ウィンベにあるカムクワンバの小学校は再建され、今では風力および太陽光発電を利用している。

カムクワンバは現在、ニューハンプシャー州ハノーバーにあるダートマス大学工学部の2年生である。24歳のカムクワンバは、マラウイに「安定的な電力」を供給できる会社を作りたいと考えており、特に再生可能エネルギー源によってその目標を実現させたいと考えている。「自分の工学技術を活かして、風力と太陽光をより効果的に利

用できるよう挑戦していきます」とカムクワンバは言う。現状では、マラウイの農村部で電力を利用できる世帯は、ほんの2%にすぎない。

ルイズ・フェナーは米国國務省国際情報プログラム局のスタッフライターである。



ウィリアムの感動的な物語の詳細はで！
<http://goo.gl/ROigg>

上 まだ始まったばかり：ウィリアム・カムクワンバは、マラウイで3基の発電用風車を自分の家の周辺に作った。彼はマラウイ全域に安定的でクリーンなエネルギーを供給したいと思っている
右 百聞は一見にしかず：ウィリアム・カムクワンバは、廃品の金属とプラスチックを再利用してマラウイで風車をつくった



騒音が 電気に

ジェーン・モース



環境のために1ゴール！ 圧電技術は振動をエネルギーに変換する。
だからファンの発する歓声がクリーンで再生可能なエネルギーの源となる

ほとんどの人にとって、騒音は頭痛以外の何も生み出さない。しかしアラブ首長国連邦シャルジャ・アメリカン大学の4人の学生は、騒音のエネルギーをとらえて電力に変える方法を見つけ出した。

「人々はすでに、太陽光、風力、地熱エネルギー、それにバイオ燃料の開発に取り組んでいます。私たちは誰もまだ取り組んでいない分野で何かユニークなことができるかと考えたのです」と学生の1人、アルサラン・モハンマドはエド・アラビア（訳注 中東・北アフリカ地域をカバーする教育関連サイト）に語った。

自動車、機械、人、動物はみな、音と振動を発生するが、その音と振動は電圧を発生させる物質によってとらえることができる。モハンマドと仲間の学生、モハンマド・アジマル、ダニアル・アフマド、モハンマド・アティークは、そうした物質を利用して新たな装置を開発した。機械的エネルギー、音響ノイズ、超音波を、クリーンな再生可能エネルギーに変換する装置である。

これらの装置に使われているのは圧電技術と呼ばれるもので、さまざまな利用法の可能性が考えられている。例えば、靴の中に取り付けられれば、携帯電話などの電子機器を充電することができるかもしれないし、道路のバンブ（隆起部）に取り付けられれば、エネルギーを蓄え、周辺の街路灯を灯すことができるかもしれない。そして超

満員のサッカースタジアムの観衆が発する大歓声には、フィールド上の選手たちにエネルギーを与えるだけにとどまらない利用法があるかもしれない。

圧電装置は、人間の耳には小さすぎて聞こえないノイズ、例えば水族館で発せられる音などでもとらえることができる。

アジマルは、彼らのチームの研究が、世界の貧しい人々の生活の質を向上させるためにも活用されるかもしれないと信じている。

このアメリカン大学の4人の学生の研究は、革新的な取り組みとして、英国工学技術学会（IET）からも認められている。IETは、工学と技術の分野で世界的に高い評価を得ている専門団体である。

学生たちは、再生可能・持続可能な代替エネルギーの開発を推し進める世界的な動きが研究の動機となったと話している。モハンマドはエド・アラビアにこう語った。「もし私たち若者が、代替エネルギー開発に貢献するための対策をたった今講じなかったら、自分たちの可能性に限界を設けてしまうことになるでしょう。若者として、自らの革新的アイデアを前進させ提案する、今がそのときなのです」

ジェーン・モースは米国国務省国際情報プログラム局のスタッフライターである。

LIGHTING UP

インドの農村にイノベーションの明かりを灯す

キャスリン・マコーネル

シャイレシュ・ウパディヤイは、夜間に勉強するといつも気分が悪くなった。

ウパディヤイが育ったインド、グレラの農村は、電力事情が悪かった。電気を利用できるのは日中の数時間に限られていたため、夜になると灯油ランプの明かりで勉強しなければならなかった。

しかしウパディヤイにはぜんそくがあり、灯油ランプから出る有害な煙のせいで、勉強する夜にはいつも呼吸が苦しくなった。ウパディヤイは学校を辞めざるを得なかった。

ウパディヤイは勉強することをあきらめないと決心した。そして素晴らしいアイデアを思いついた。それはトラクターのバッテリーを使って明かりをともしというアイデアだった。彼はトラクターのバッテリーから電球型蛍光灯にエネルギーを送る回路基板を設計した。電球型蛍光灯は通常の電球よりもエネルギー効率に優れている。

この発明のおかげで、ウパディヤイは大学に入学し、工学を勉強する

ことができるようになった。彼は同じくグレラで育ったクラスメートのウジャラ・シャンカーに、自分の発明について話した。そして2人はベンチャー事業「トラクター・ファクター」を共同で設立した。農村の家々に明かりを灯し、学校へ通う子どもたちがより長時間勉強できるようにすることを目的とした事業である。

「私と同様、農村に暮らす生徒の多くは、知力と熱意があるにも関わらず、前進できずに苦勞しています」とウパディヤイは、彼のような社会起業家を支援している国際的団体アショカに語った。

しかしウパディヤイとシャンカーの事業には多くの困難が伴った。2人はまず、回路基板を使うよう村人を説得しなければならなかった。村人の多くは、バッテリーから電気を取ることでバッテリーの寿命が短くなるのではないかと心配していた。しかし回路基板を定期的に使うことでバッテリーの寿命が延びることを知って、村人たちは驚いた。また村人たちは電線をつなぐとき感電するのではないかと恐れていた。しかし

ウパディヤイとシャンカーは実演を通して、この装置の電圧はわずか12ボルトで、きわめて安全であることを示してみせた。

こうして、グレラの生徒たちは、トラクター・ファクターの回路基板を使い始めた。より長い時間勉強することが可能になり、試験に合格する生徒の数は2倍近くに増えた。大気中に排出される二酸化炭素の量は、1カ月当たりおよそ24万リットル減少した。

「ニーズと手の届く価格について理解すること、そして解決策をきめ細かく調整すること、それが鍵です」とウパディヤイはアショカに語った。「よき観察者になることで、問題点を見極めることができ、最もシンプルでなおかつ大きな影響を与え得るアイデアを見出すことができるのです」

ウパディヤイとシャンカーは、自分たちのアイデアをより大規模なプロジェクトにも取り入れてきた。「ステッチズ」という名のこのプロジェクトは、農民の社会・経済的福祉の向上を目的としている。彼らはこれまでにインド農村部で200人以上を支援してきた。そしてこの活動が認められたこともあり、シャンカーは研究奨学金を得てカリフォルニア大学バークレー校ゴールドマン公共政策大学院で修士号取得を目指すことになった。シャンカーは米国で教育を受ける初のグレラ出身者となる。

キャスリン・マコーネルは米国国務省国際情報プログラム局のスタッフライターである。



Courtesy of Stitches



シャイレシュとウジャラからプロジェクトについて説明を聞いてみよう！

<http://goo.gl/KzlmA>

チーム・ベルギー 手の届く ソーラー住宅を

カーリン・リーブス



ベルギー、ヘント大学の学生たちは、2011年のソーラー住宅コンペに向けて家の設計を始める前に、少し下調べをすることにした。2009年9月、彼らはワシントンD.C.を訪れ、ソーラー・デカスロンとは一体どんなものなのかを自らの目で確かめたのである。学生の1人が言うように、彼らは「ヒントと秘訣」を学びに行ったのだ。

2011年ソーラー・デカスロンは、米国エネルギー省の主催で行われた。世界中から大学チームが集結し、費用効果およびエネルギー効率に最も優れ、最も魅力のあるソーラー住宅のデザイン、建設、およびその操作性を競い合った。

ワシントンのナショナル・モールに展示された住宅は、どれもデザインが美しかった。現代的な、二酸化炭素ゼロの暮らしのための洗練された先端技術ソリューションを備えていた。それらの住宅は「魅力的だった」と、24歳のヘント大学学生マイケル・アレンスは振り返る。し

かし、これが大衆市場向けに建てられた住宅なのだろうか？

「私たち皆が考えたのは『なるほど、これがエネルギー効率の最も良い家ということか。でも誰にこんな家を買う余裕があるのだろうか。こんな家を建てて何になるのだろうか』ということでした」とアレンスは言う。「エネルギー効率に優れ、あらゆる人たちが、少しでも違った暮らし方をする気持ちさえあれば、手に入れることのできる住宅を作ることが可能だと証明することが、私たちの目標になりました」

学生たちは集中的なブレインストーミングを重ね、そこから4つの代替デザインを考えた。そして、最終的に選んだのが「Eキューブ」だった。工場組み立てのEキューブは、基本的な居住ニーズを満たす住宅のいわば「DIYキット」である。Eキューブは高価な建材や仕上がり材料を必要としない。ヘント大学の学生たちの見積もりに

よれば、この住宅の販売価格は、電気器具も含めて約26万8,000ドルになるという。過去のソーラー・デカスロンで優勝した住宅のおよそ半分の価格である。

アレンスとプロジェクトに取り組むその他の3人の学生は、彼らが考案した4つの代替デザインそれぞれの持つ特徴を1つのデザインに融合した。作業プロセスは時として困難を伴った。チームは7人の学生が中心となっており、チーム・ベルギーと呼ばれている。彼らは、ベルギーの建築基準が一般的な住宅とは異なるデザインの住宅には必ずしも適用されないということを知られた。さらに、お役所的な手続きが、プロジェクトを完成させようとする学生たちの意気込みを鈍らせるという問題にも直面した。

ついに完成した住宅に、彼らは興奮を覚えた。

2階建てのEキューブ（エネルギー・キューブの略）は、文字通りの立方体形をしている。サイズは8m×8mで、居住スペースの総面積は、ソーラー・デカスロンで認められている床面積の上限である93m²ちょうどである。寝室を2つ備えたベーシックで機能的な住宅で、中央居住エリアの開放的で高い天井がスペースを実際よりも広く見せている。

立方体のデザインは住宅をコンパクトにし、風雨にさらされる表面積を減らす効果がある。こうした効率性が、壁塗料や装飾などの「余分」を省いたことと相まって、この住宅の価格を手の届くものに抑えることに一役買っている。「暖かい」素材（木材）と「冷たい」素材（スチール）を合わせることで、住宅に個性的で魅力のある外観を与えることができた、チーム・ベルギーのメンバーは言う。

アレンスはこう語った。「私たちは、見た目のとても美しいものや、従来型の住宅は作りたくなかったのです。私たちの目標は、持続可能でエネルギー効率に優れ、手

「エネルギー効率に優れ、
あらゆる人たちが、
少しだけ違った暮らし方をする
気持ちさえあれば、
手に入れることのできる住宅を
作ることは可能だと証明することが、
私たちの目標になりました」

の届く価格の家に住むことは可能だということを証明することでした。ただ、そうした家に住むには少し違った暮らし方をする必要があるかもしれませんが…。この家にとどりに着いたことをとてもうれしく思っています。結局、ベーシックでシンプルなデザインが美しいのです」



カーリン・リーブスはワシントンD.C.で活動するフリーランスライターである。

このビデオを観て、2011年ソーラー・デカスロンについてさらに詳しく知ろう！
<http://goo.gl/6pxHK>

見開きの反対側ページ 明るく輝く一チーム・ベルギーのソーラー住宅の明かりが、ワシントンD.C.の夜空を照らしている。2011年ソーラー・デカスロンに参加したベルギーのチームは、エネルギー効率と美しさは両立できることを証明してみせた
挿入写真 ソーラー住宅でくつろぐ訪問客がEキューブの設計者たちとくつろいでおしゃべりしている
下 1つの村ができる—米国エネルギー省主催の2011年ソーラー・デカスロンには、世界中から大学のチームが集結し、エネルギー効率に優れた住宅を建設した





京都ボックスは木を燃やすことなく、お湯を沸かし、食品を調理することが可能で、このケニアのマサイ族の女性たちのような人々に恩恵をもたらすと同時に、森林伐採を減らしている

ジョン・ベーマーの「京都ボックス」の始まりは、彼の2人の幼い娘との科学実習だった。しかし間もなくこの調理器は、食品の調理に苦勞している30億の人々に、クリーンな再生可能エネルギーを利用することによって、大きな恩恵をもたらすことになった。

初代の京都ボックスは、プレキシガラスと2つの段ボール箱から出来ていた。一方の箱にはアルミホイルが張られ、もう一方の箱は内側が黒く塗られていた。これを使えば、薪がなくてもお湯を沸かし食品を調理することができる。このソーラー調理器は、クリーンで誰もが利用できるエネルギー源である太陽光を利用している。京都ボックスは、清潔な水や薪を入手することが困難な人々にとって、安全で健康的に調理を行う上で大きな前進をもたらした。

薪を調理に使うことは、世界中の多くの地域で広範囲に及ぶ森林伐採を引き起こしてきた。そして森林伐採

箱の中で調理

マーク・トレイナー

は、気候変動の主な原因と考えられている。さらに原始的な家庭のオープンから出る煙は、途上国での呼吸器疾患の主要因となっている。一方、京都ボックスは二酸化炭素を排出しない。

ベーマーはノルウェー人で、ケニアで生活し会社を営んでいる。彼は太陽光を利用した調理法について10年間研究を続けていた。しかし初代の京都ボックスは、それよりもずっと短期間で完成した。ベーマーはCNNにこう語った。「これを作るのには一度の週末しかかかりませんでした。そして試してみたら最初からうまくいったのです。あまりにシンプルであっけにとられました」

京都ボックスは2009年、英国の環境保護団体である「フォーラム・フォー・ザ・フューチャー」とフィナンシャル・タイムズ紙が開催する、気候変動問題を解決する発明コンテストで大賞に選ばれ、賞金7万5,000ドルを贈られた。

京都ボックスは（改良が加えられ、現在はリサイクルされたプラスチックから作られている）、そのデザインのシンプルさのおかげで、1つわずか5ドルで作ることができる。

「私たちは命を救い、森林を救っているのです」とベーマーはロンドンのテレグラフ紙に語った。「こんなにわずかなお金でこれほどのインパクトを与えられる技術は、他にはないだろうと思います」

マーク・トレイナーは米国国務省国際情報プログラム局のスタッフライターである。

箱の中はどうなっている？最新版の京都ボックスは、ポリプロピレンとアクリルガラスで出来ている。ベーマーのオリジナルのソーラー調理器には、プレキシガラス、段ボール、アルミホイル、黒い塗料が使われていた

ソーラー調理器の利点についてビデオを観てみよう！

<http://goo.gl/XwXwW>



Photos: Courtesy of Kyoto Energy Ltd.

2012年に「グリーンな行動」を 実践すべき **10** の主な理由

リオ+20への道より

今年は世界中の若者にとって、地域と世界の持続可能な開発に関する諸問題について、運動を起こし、行動する年である。あなたが取り組みに参加すべききわめて重要な10の理由がここにある。

1 それはあなたの未来だから！

2050年、あなたは何歳になっているだろうか。私たちの今日の選択と行動が、私たちだけでなく次世代にとっての未来の世界を形作るのです。自分の子どもたち、さらにその子どもたちにより良い世界を残すために必要な資質や能力を、あなたは持っているだろうか？

2 リオ+20

ブラジルが主催する重要なイベントは、ワールドカップとリオデジャネイロ・オリンピックだけではない。その前に「国連持続可能な開発会議(リオ+20)」が開催される。このサミットの準備が進められている今こそ、持続可能な開発への取り組みに参加しよう。世界のリーダーたちが、よりグリーンで環境にやさしい未来への方針を打ち出すよう促していこう！

3 経験を積み、差をつけよう

世界をより良い場所にするのと同時に、就職の見通しも良くしよう！持続可能な開発の分野で働いて、良い行いを積むとともに価値ある実地経験を積もう。履歴書に持続可能な開発に携わった経験について書けるとしたら、それは素晴らしいことだ！

4 成長分野に参加しよう

世界は今、二酸化炭素排出が少ない未来への取り組みを進めている。それにより環境保護関連の仕事は、日々増え続けている。ドイツだけをとりまいても、再生可能エネルギー部門の仕事の数は、2030年までに2010年のレベルから35%以上増加すると見込まれている。未来の雇用市場に今から備えておこう！

5 あらゆるスキルが目的達成に役立つ

あなたはどんなことが得意だろうか。あなたのスキルはきっと持続可能な開発の役に立つはずだ。環境保護から、工学、政策、教育、メディア、研究まで、あらゆる種類の才能とスキルが必要とされている。持って生まれた才能を働かせ、現状にプラスの変化をもたらそう！

2012年に「グリーンな行動」を
実践すべき **10** の主な理由

6 症状ではなく、原因に取り組もう

貧困、環境破壊、経済的不平等は、相互に関連し合う複雑な問題が引き起こす症状であり、持続可能な開発が取り組みを目指している課題である。取り組みに加わって、これらの多面的な問題の根本原因と戦う手助けをしよう！

7 あなたは今、これまで以上に必要とされている

持続不可能な生活パターンによる悪影響を受けている個人、コミュニティ、国の話を、私たちは毎日のように耳にしている。今こそ行動を起こすのにふさわしいときだ！

8 あなたは独りではない

持続可能な開発は比較的新しい分野かもしれないが、とても人気が高い。さまざまなバックグラウンドを持つ人々が、この分野を維持・成長させるために働き、ボランティア活動を行っている。今こそ活動に参加して、志を同じくし、この過程に大きな役割を果たしている若者たちと出会おう！

9 創造的である自由

持続可能な開発の問題に対する認識を高め、行動を起こすためには、前向きな思考とたくさんの想像力が必要だ。あなたは発明家、起業家、芸術家、あるいは活動家になりたいと思いませんか。持続可能な開発を促進し、想像力を刺激しよう！

10 楽しさと冒険

世界を救うことが楽しいはずはないなんて誰が言ったのだろう。大規模な活動やオンライン・キャンペーンに参加してみよう。芸術を創造してみよう。それも正しい目的のために。持続可能な開発に関わろう。そうすればきっと、地球上で最も活力と創造性に満ちた人々と共に活動することができるだろう。何が起ころか、きっと驚くはずだ！

「リオ+20への道」は、世界中の60を超える協賛団体から成る連合組織である。持続可能な開発に関する問題に取り組み、2012年国連持続可能な開発会議（別名「リオ+20」）の成果に影響を与えられるよう、若者たちをやる気にさせ、元気づけ、活動に引き込み、支援することを目的としている。ピース・チャイルド・インターナショナルがこの連合組織の調整役を務めている。

本稿に示された意見は、必ずしも米国政府の見解あるいは政策を反映するものではない。



Mathieu Soete



©AP Images/Ken Osburn

上 レッツゴー！—100人以上の若者が、スペイン、モジナナのユニバーシティー・オン・ユース・アンド・ディベロプメントに集まり、世界規模の2011年ムービング・プラネット・デー行動に参加

下 準備しよう！—ますます多くの学生が持続可能な開発の分野で職業に就く準備を始めている。クレムソン大学の工学部学生、ジャッキー・ブリザードもその1人

Have Something to Say?



Join the Conversation!

**Visit us on Facebook at
[www.facebook.com/ejournalUSA!](http://www.facebook.com/ejournalUSA)**

米国大使館 広報・文化交流部

アメリカンセンターJapan
アメリカンセンター・レファレンス資料室

札幌アメリカンセンター・レファレンス資料室
〒064-0821 札幌市中央区北1条西28丁目 米国総領事館内
Tel: 011-641-3444

アメリカンセンターJapan
〒107-0052 東京都港区赤坂1-1-14 NOF溜池ビル8階
Tel: 03-5545-7431

関西アメリカンセンター・レファレンス資料室
〒530-8543 大阪市北区西天満2-11-5 米国総領事館ビル7階
Tel: 06-6315-5970

福岡アメリカン・センター・レファレンス資料室
〒810-0001 福岡市中央区天神2-2-67 ソラリア・パークサイドビル8階
Tel: 092-733-0246

在沖縄米国総領事館・広報文化課レファレンス資料室
〒901-2104 沖縄県浦添市当山2-1-1
お問い合わせはオンライン質問箱をご利用ください
<http://go.usa.gov/TCsP>

米国大使館のウェブサイト

米国大使館 <http://japanese.japan.usembassy.gov/>

アメリカンセンターJapan <http://AmericanCenterJapan.com/>

レファレンス資料室 <http://usinfo.jp/>